

年頭所感

# 今までの発想にとらわれない 自己変革

～高知の地域医療を守る最後の砦になろう～

社会医療法人 近森会 理事長 近森 正幸

## はじめに

2021年も新型コロナに始まり、夏以降、新型コロナの最大規模の第5波が全国的に波及し、秋から冬にかけてまるで神風が吹いたように急激に減少している。ワクチンの普及とともにマスクや手洗い、3密を避ける国民の新しい生活習慣の徹底、さらには新型コロナがうまく増殖ができず自ら死滅したのではないかという研究もある。冬の到来とともに新しい変異株の流行などにより第6波が押し寄せてくることも考えられ、今年も医療機関として厳しい戦いが続くと考えている。

過去2年間の新型コロナの猛威で高知の医療にも大変な変化が起こっているが、地域医療を守る最後の砦として使命感を持って対応していきたい。

## 新型コロナへの対応

高知県の新型コロナに対する医療体制は、高知医療センターをはじめ多くの病院が協力して入院協力医療機関が整備されているが、そのほとんどは軽症から中等症対応の病床で重症患者の受入れ病床は極めて少なかった。高知県でもパンデミックになれば人工呼吸器やECMO(人工心肺装置)が必要な重症患者が増加するため、当院でもフェーズ3以上でSCU(脳卒中)病棟15床を中等症から重症対応のCU(コロナ)病棟7床に転換し、第3波以降、第5波まで通常の救命救急医療と並行して多くの重症患者の診療にあたってきた。

これまでの救急医療や集中治療のノウハウをいかし、感染症内科の石田正之部長を中心に医師同士のチーム医療、多職種とのチーム医療で良好な治療成績を出すとともに、感染性がなくなりリハビリが必要な場合は一般病棟への転棟や紹介元への転院を積極的に行った。限りある病棟機能を効率的に運営し、スムーズな重症患者の受入れと治療を行い、コロナに関しても最後の砦としての役割を十分に果たすことが出来た。

## 本当に必要な 救命救急医療への対応

近森病院は1964年6月の救急病院告示以来、半世紀以上にわたり「救急の近森」として救急患者の受け入れを行ってきた。その間、営々と医療の質を高め、2003年2月には地域医療支援病院に承認され、2011年5月には救命救急センターに指定されている。

5カ年計画で急性期の近森病院は338床から452床に増床、総合心療センターの急性期精神科病床60床を統合し512床になった。これにより今まで満床でお断りせざるを得なかった紹介や救急、さらには外来からの入院患者をスムーズに受け入れている。

2020年4月の診療報酬改定で急性期の基幹病院として在り続けるためには重症度、医療・看護必要度がさらに厳しくなり、重症の患者を数多く集め、早く治して、早く在宅へ帰すことが求められるようになった。そのため重症の救急、紹介の患者を今まで以上に積極的に受入れ、夜間や休日であっても手術や処置を迅速確実に行い、たとえ高齢患者であっても栄養サポートやリハビリテーションで全身状態を速やかに改善している。

病気は治っても障害が残る場合は、近森リハビリテーション病院が脳卒中や脊髄損傷患者、近森オルソリハビリテーション病院が整形外科手術後の患者を積極的に受入れ、リハビリテーションを提供するばかりでなく、地域の病院や施設と連携し、可能な限り住み慣れた地域に帰って頂くよう頑張っている。

## 最後に

近森は今までの発想にとらわれず、自己変革を限りなく続け、成長してきたが、職員一丸となって「高知の地域医療を守る最後の砦になる」という使命感をもって常に変化し、今まで以上によい病院に変わり続け、県民、市民に頼られる病院になりたいと願っている。